

## 「教養コア科目」を振り返る——FDフォーラムの報告

奈良女子大学における教養教育改革の二本柱として、初年次向け少人数セミナー「バサーージュ」と共に立てられた「教養コア科目」が始まって二年目が終わりました。前年度の試行に引き続き、平成28年度からは科目数も増えて、本格的に8科目が開講されました。そこで教育システム研究開発センターでは、授業を担当してくださった先生方から多彩な学習方法を取り入れた授業の様子やそこでの学生の反応などをうかがい、より魅力的な「教養コア科目」の構築に向けて改善の方向を検討するFDフォーラムを企画しました。2017年2月20日に開催されたフォーラムの内容をご報告します。

多様な学びの方法論を活用して授業を作っていく試みです。

フォーラムでは最初に、前年度からスタートして、ゼミ形式のグループワークを活用したアクティブラーニングを展開している二つの教養コア科目、「ジェンダーから見た人間と社会」「持続可能な社会（放射線の科学と思想）」について報告をしていただきました。その後、学生の授業アンケートの結果を参照しながら、従来の教養科目のスタイル（多人数の講義形式）でのコア科目について、それらのコーディネーターや授業担当の先生方に感想や反省をお話いただきました。

### ■ 報告「ジェンダーから見た人間と社会」

三成 美保 (生活環境学部)

#### 1. 教養コア科目「ジェンダーから見た人間と社会」

2015年、2016年開講  
形式 (2016年度)

第7回 オムニバス講義 (全7名)

第6回 ミニゼミ (6ゼミ)

第2回 全体発表会 (3ゼミずつ)

受講生:定員(80名)→60名(2015年)・40名(2016年)  
学部・学年は多様(ただし、1年・文・生環が多い)

#### 授業計画

第1回 10/6 講義:三成(法学):女子大とLGBTI(性的指向・トランスジェンダー・性分化疾患)

第2回 10/13 講義:松岡(文化人類学):女性は何を産む性か?—リプロダクティブヘルスライツを考える

第3回 10/20 講義:安田(生物学):「女心と秋の空」を生物学から考える

第4回 10/27 講義:鈴木(日本史):女性の医療環境について歴史的に考える—江戸時代の産科医療を事例に

第5回 11/10 講義:山崎(表象論):サブカルジェンダー論

第6回 11/17 講義:中川(文学):ジェンダーと恋愛

第7回 11/24 講義:青木(経済学):ビジネスとジェンダー

2016年度開講 教養コア科目		
科目名	担当者	
コア1	なら学	寺岡伸悟ほか 計14名
コア2	持続可能な社会(放射線の科学と思想)	渡邊利雄、西村拓生 ほか計6名
コア3	ジェンダーから見た人間と社会	三成美保ほか 計7名
コア4	人類史	西谷地晴美ほか 計5名
コア5	古典を読むI	鈴木広光、大平幸代、 岡崎真紀子
コア6	古典を読むII	鈴木広光、矢島洋一、 尾山慎
コア7	共生科学	高田将志、高村仁知 ほか計3名
コア8	生命・運動・健康	星野聡子ほか 計7名

「教養コア科目」は、本学の教養教育の理念である「5つの問いと7つのアプローチ」を具現化するために、複数の教員が——単なるオムニバスではなく——専門領域を有機的に連関させるコラボレーションに基づき、ゼミや実習、フィールドワーク、反転授業、ディベートなど、

※ミニゼミ選択希望カードを 11/24 に配布し、11/28 (月) に回収。11/30 に通知。

- 第 8 回 12/1 ミニゼミ：グループワーク (1)
- 第 9 回 12/8 ミニゼミ：グループワーク (2)
- 第 10 回 12/15 ミニゼミ：グループワーク (3)
- 第 11 回 12/22 ミニゼミ：グループワーク (4)
- 第 12 回 1/5 ミニゼミ：グループワーク (5)
- 第 13 回 1/19 ミニゼミ：グループワーク (6)
- 予備日 1/26 (発表会準備及び補講等のため)
- 第 14 回 2/2 全体発表会 (1) 4 ゼミ発表
- 第 15 回 2/9 全体発表会 (2) 3 ゼミ発表+全体総括

## 2. アンケート結果から

(2017 年 2 月実施 回答数 34)

問：この科目を受講してよかったですか？

- ・たいへん良かった (19)
- ・良かった (15)
- ・どちらとも言えない (1)
- ・よくなかった (0)
- ・まったくよくなかった (0)

問：この授業を受講した動機は何ですか？

2つ以上を選んでかまいません。

- ①教養を身につけたい (15)
- ②討論する力を身につけたい (10)
- ③論理的に考える力を身につけたい (4)
- ④プレゼン力を身につけたい (10)
- ⑤発想力を身につけたい (1)
- ⑥企画力を身につけたい (1)
- ⑦最先端の研究成果を知りたい (0)
- ⑧もともとジェンダーに関心があった (28)
- ⑨ジェンダーに関心があったわけではないが、シラバスを見て授業内容に関心をもった (6)
- ⑩早く友だちをつくりたい (0)
- ⑪早くゼミを体験したい (10)
- ⑫早く先生と親しくなりたい (4)
- ⑬教養の単位が必要である (5)
- ⑭開講時間の都合が良い (7)
- ⑮他の授業と違っておもしろそうである (9)
- ⑯専門に進んだときに役に立ちそうである (5)
- ⑰なんとなく(積極的な理由はない) (2)
- ⑱その他 (1) 自分の専門以外の視点からジェンダーについて考える機会だと思ったから

問：この授業でどのような力がつきましたか？

2つ以上を選んでかまいません。

- ①教養 (20)
- ②討論する力 (19)

③論理的に考える力 (8)

④プレゼン力 (34)

⑤発想力 (8)

⑥企画力 (6)

⑦その他 (1)

⑧とくに身についた力はない (1) ※希望ゼミに配属されなかった

問：あなたの今後の大学生活や人生にとって、この授業で得た知識や能力は役に立つと思いますか？

- ①とても役に立つと思う (16)
- ②役に立つと思う (16)
- ③どちらとも言えない (2)
- ④役に立たないと思う (0)
- ⑤まったく役に立たないと思う (0)
- ⑥役に立たないが楽しかったからそれでよい (0)

## 授業の感想から

・最初はミニゼミがあるということで緊張していたし、実際に最後まで今期の授業の中では最も大変であったといえるほどだが、そのぶん自分のミニゼミに関しての知識はついたし、他のゼミの発表をきいて新しいことや今までの知識についての補足などを得ることができた。(文 1 年)

・1 回生という早い段階からゼミを体験することができて良かった。討論の仕方はもちろん、パワーポイントを使ったプレゼンをするためにどれほどの準備が必要かわかり、今後役に立てることができそうだ。(生環 1 年)

・前半の講義では、様々な観点から社会をジェンダーを通してみると今まで気づけなかった現象や問題を知ることができました。後半のゼミ形式の授業では、今回の討論やその準備がとても大変でしたが、得るものは大きかったと思います。(文 1 年)

## 3. まとめと今後の課題

- ・全体としては成功
- ・授業目的を達成できている。
- ・受講生の満足度が非常に高い。
- ・「オムニバス+ミニゼミ」は教育効果が高い。
- ・様々な学部・学年との交流が活性化をもたらしている。
- ・今後の課題
- ・希望ゼミへの配属
- ・教員(学部)の多様性確保
- ・ゼミが活発なので、教員も楽しいが、負担もなかなか大きい。

## ■ 「持続可能な社会（放射線の科学と思想）」の概要と反省点

鈴木康史（文学部）

### 1. 授業形態

担当：西村拓生（文、コーディネーター）、石井邦和（理）、三方裕司（理）、渡邊利雄（理）、小路田泰直（文）、鈴木康史（文）

前半：担当教員によるオムニバス講義

後半：ゼミ形式による演習と各自の発表

### 2. 2016年度の授業スケジュール

第1回 10/05 西村先生によるガイダンス

第2回 10/12 以下講義：「誰」の視点で考えるのか（西村）

第3回 10/19 放射線の物理学（石井）

第4回 10/26 放射線の基礎的な化学（三方）

第5回 11/09 「フクシマ」はどのように語られているか（鈴木）

第6回 11/16 『核の世紀』（東京堂出版、2016年）について（小路田）

第7回 11/30 科学的に正しく怖がる 放射線の人体に与える影響（渡邊）

第8回 12/7～第12回 1/11 西村先生中心に6名の学生全員でのゼミ形式、他の教員もできる限り参加した。なお、一年目はグループに分かれての討議であった。

第13回 1/8～第15回 2/1 各自の発表と討議（最終回は全体討議）

・毎回コミュニケーションペーパーを書いてもらい、次回に前回の授業のまとめとともにレジュメにして配布（西村先生とチューターの大学院生が担当）

### 3. 学生たちの感想



・現在の私たちはただ単純に「賛成」「反対」という立場に固執するのではなく、それぞれの問題について知り、考えて、それぞれの問題に対する意見をもつ必要がある。私たちは常にこれからもこの問題について考え続けなければならない。考えることを放棄してはならない。

・自分で調べてパワーポイントで発表をするという能動的な授業だったので、力がついたと思う。（中略）これからはちゃんと新聞や本を読んでいろいろな情報を得た方が正しいことを自分で知れて役に立つのだと思った。

・より良い選択をするためには、情報が必要ですし、判断力も必要です。（中略）知らないで発言するのは無責任であり、知ろうとしない無関心もまた無責任なのだと思います。知ることで自分の世界は広がると思います。意識しなければ無関心になりがちな自分を変えていきたいです。また、その中で自分の意見を持てるようにしたいです。

・自身の関心のある事柄について調べられたことはとても楽しかったし、有意義と感じた。しかし、あまり「答え」というような結論が出せなかったことが残念だ。

・調べる内容が多かったので、調べる期間を増やしてほしいかった。授業を少し早く終わってからテーマを話し合うか、テーマ決めの話し合いをなくすかなどしていただけるとありがたかった。

### 4. 担当教員の感想と反省点

・答えのないテーマに関して、学生の皆さんは一生懸命調べてプレゼンしていたように思います。インターネットが身近にある年代の学生にとって、インターネットに書いてあることが正しいと思いがちですが、今回の原発というテーマに関しては賛成反対ともにいろいろなサイトがあるため、何が正しいのか、どれが自分の求めていることなのか等をきちんと考えることを求めるような授業になっていたような気がします。（石井）

・毎回の講義後のまとめを読みながら、昨年と異なった視点で考え発表しているなど感じました。問題意識を持って、学生が主体的に自分の考えや視野を広げようという雰囲気を感じられました。正直、「うちの学生さんなかなかやるなあ」です。（渡邊）

・自分たちで調べたことを全員の前で発表するという、かなりハードルの高い講義形態に対し、ひるむことなく果敢に挑戦してきた受講生だけあって、最終的に残った皆さんは、しっかりと自身の意見を述べ、考えを深めてくれていると感じました。（中略）一点だけ、欲を言うなら、今回は個人での発表という形式になったため、何人かのプレゼンがややひとりよがり気味になっていた印象があります。事前に学生同士でディスカッションをしてお互いの発表内容をブラッシュアップする機会がなかったことが悔やまれます。（三方）

・これからも考え続けねばならない、まだ答えが出ない、という学生たちの感想がありました。これは授業がうまくいった証左なのだろうと思います。そのような学生の声の聞くと、このままでは終わりたくないと思います。(鈴木)

5. FD での報告を終えて

教養科目でゼミという、驚かれることも多い気がしますが、教養コア科目の一つの柱とっていいであろう、

ゼミ形式の教養科目として、一つの形は示せたのかなと今は感じています。実際、学生たちは非常によく頑張ってくれたと思います。いろいろな学部から学生が集まってきてゼミをするというのも新鮮で、これをどのようにしてのちの学び(それは「専門」なのか「教養」なのかわかりませんが)につなげてゆくのかなど、いくつかの課題は残っていますが、新しい教育の可能性がそこにはあると思いました。(鈴木)

■ 担当の先生方の振り返りから

教養コア科目 アンケートより抜粋		*各項目の最高点を5.0とし、平均点を表示												
科目名	受講者数	回答数	回収率	授業の目的は明確でまともであった	内容がよく理解できているようであった	授業内容は興味あるものがあった	新しい知識や物事の見方が得られた	発表・レポートなどの与えられた課題は適切であった	担当者は学生の参加を促し、十分応答した	担当者は学生の理解度を把握し適切に対応した	私はきちんと出席した	私は意欲的に取り組んだ	予習・復習を行った	この授業に満足した
なら学	188	146	78%	4.4	4.3	4.3	4.5	4.1	3.7	3.7	4.8	4.3	2.7	4.4
人類史	187	105	56%	3.8	3.9	3.7	4.3	4.1	3.4	3.5	4.8	3.7	2.8	3.9
古典を読むⅠ	114	99	87%	4.4	4.3	4.2	4.3	4.4	3.5	3.7	4.8	4.0	3.2	4.0
古典を読むⅡ	70	61	87%	4.5	4.4	4.3	4.9	4.5	3.7	3.8	4.7	4.2	3.4	4.4
生命・運動・健康	65	57	88%	4.4	4.3	4.3	4.4	4.3	4.0	4.0	4.8	4.1	3.0	4.3
ジェンダーから見た人間と社会	41	34	83%	4.2	4.3	4.5	4.5	4.3	4.3	4.4	4.8	4.6	4.1	4.6
持続可能な社会(放射線の科学と思想)	8	6	75%	4.8	4.7	4.7	5.0	4.8	4.7	4.5	4.3	4.7	4.3	4.8

・「なら学」は3学部の先生に担当いただくリレー講義で13人の先生方に奈良に関していろんな角度からアプローチをしていただき、広く、浅く、奈良に興味をもってもらいたいと考えています。うちの学生はレベルが高いので、専門から離れていても忍耐強く聞いてくれるからこそ成立した授業かなと思います。学生一人に一枚、15回分の授業の感想を書けるコミュニケーションペーパーを作り、感想を授業の終わりに回収する。教員はアドバイスがあったら意見を書いて次の週に返す。こうして、ポートフォリオの形で十数回分、先生の答えも入っているインタラクティブなものを受講人数分作っています。先生方みなさん、ほんとに丁寧にやってくださいます。それが「満足度」につながったのかなと。最初は授業内容が難しく、学生のわかりにくいという声もあり、その中から学んでくださって今はわかりやすいレジュメと授業になっています。そういう先生方のご苦労もあります。(文学部 寺岡先生：コーディネーター)

・「人類史」はもともと前期・後期で通年でやっていたものを一つに集約せねばならず、今年一つにまとめるというのが先にきており、まとまりがよくなかったと思います。僕には僕なりの目的はありますが、過去の人選を引きずっているところがあるので完成型になっていません。受講は自然系の学生が多い。理由はよくわかりませんが、時間帯が理系の学生がとりやすいのだと思います。授業でやっている中でいうと「環境論」についてのウケがいいので、高田先生を最初に、最後に僕がや

れば新しい人類史的なものになるかなと思っています。もうちょっとがんばって改善していかないと点数的に他のところに追いつかないかなと。(文学部 西谷地先生：コーディネーター)

・「古典を読むⅠ」は今年初めてで前身の科目も何もない状態から始めたんです。人数は少ない予定だったので、教員同士の議論も挟んでいこうと考えていましたが、蓋を開けてみたら教室が一杯で私たちも喋るのに目一杯でそんな余裕もなく、一方的な講義になってしまったところが反省点です。題材が「漢詩」なので、まずは興味をもってもらるところから始めようと、なるべくわかりやすい言葉で伝えようと思いました。アンケートを見せていただくと結構面白がってくれているところもあったようです。しかし、授業のグレードは落としたくないので、どうしても詰め込みすぎるところがあります。そういうところは今後、改善していけたらなと思っています。(文学部 大平先生)

・今年初めての「古典を読むⅠ」は模索しながらで、100名を超える学生で苦労もありました。「和歌」について話したのですが、アンケートを見ると、理系の学生も受入れやすいようにかみ砕いて語ったつもりでも難しいとか。自分がかみ砕くのと、聞いている学生に落差があったことを認識しました。他の先生方の話にあるミニゼミ形式とかコミュニケーションペーパーとか対話形式などの工夫をしていけたらいいなという気がします。

人数は今後、もう少し少なくすることになってくるのかなという感じはしますが、人数制限をするなら、専門課程ではこのようなテキストは学ばないだろう理や生環の学生に聞いてほしいと思っていますので、学部指定のような形で優先的に受入れられる制度もあるのかなという気もしています。(文学部 岡崎先生)

・「**古典を読むII**」の方は概ねウケはよかったと思います。反省点としては教員が喋るだけになってしまったこと。学生の反応を見ながら、ということができなかったこと。それに、担当の3人が自分で考えてやっているのでも相互の有機的なつながりがなかった点があるかもしれません。お互いに比較しあいながらだと話しやすいところもありますので、一つのテーマを設定しておくとかわりやすかったのではないかなと思います。アンケートを見ると「新しい知識が得られた」という学生が多いのですが、逆にいうと基礎的なことを全然知らないということだと思います。ゼミ形式などで各自に調べさせるにしても、最低限の知識がないと有益な授業にならないと思いますので、そのバランスをどうとるかということが課題だと思います。(文学部 矢島先生)

・「**共生科学**」は以前からあった科目ですが、今年度大幅に変えました。以前は5名の方が3回ずつ授業を担当し、時間帯は今年度と変わらず受講者が40、50名でした。今年度は私がコーディネーターとなり4名の方に講義を担当していただき、余った時間を学生たちにポスターセッションさせようと大幅に授業を変えました。そのために人数制限をしたのですが、結果としてガイダンスの授業に来たのが10名、ガイダンス後に3名になった。この3名は意欲的で、「ポスターセッションやりたい」と来てくれた学生もおり、発表も積極的にやってくれましたが、いかんせん受講生が少なかったです。受講を取りやめた学生たちは「負担が大変そうで」という学生が多かったらしく「発表2回は無理だ」ということでやめたという学生がいたということでした。(文学部 高田先生：コーディネーター)

・「**共生科学**」については、学生にとって発表することは勉強になると思うんですが、学生から見れば「教養科目ならもっと楽なものいいや」という人も多いのかなと思いました。ジェンダーの授業のように活発にされているところには熱意ある学生もいるでしょうが、普通の学生にとっては荷が重いのかなというふうに思いました。しっかり勉強してほしいなと思って始めたのですが、ちょっと残念なことになって来年度に期待するところなんです。(生活環境学部 高村先生)

・「**生命、運動、健康**」は、生環の担当が2人、文学部

が2人、理学部が3人の計7人で、テーマを2回ずつ回しています。この授業は25年くらい前に始まった歴史的には長い授業で、今年度は文学部の先生をお招きして新装開店しましたが、「文学部の先生の授業が聞いて、とても面白かった」というのがいっぱいあってホッとしています。先生方と授業前に集まって話す機会も時々もっていきまして、高校生までは回答のある世界で「正しい、間違い」という世界で育ってきているので、「正しさを疑おう」ということを投げかける授業にしています。投げかけをしっかりとる年は、最後の感想でその部分がしっかりと出ます。こちらが意図することをしっかりと提示することも大事なステップなんだなと思います。「しっかり新しい知見をもって多様な考え方を身につけてください」という姿勢は貫き続けてきて、特に理学部の先生の授業が難しいというのがありまして、教員同士の打合せでは「平易な言葉に還元してお話いただく」とうにお願いして徹底するようにしています。(生活環境学部 星野先生：コーディネーター)

・「**生命、運動、健康**」の授業担当を、よくわからないまま引き受けて今年で2年目です。最初は人数もわからず、どこを基準に話し始めればいいのか難しく、1年目は2コマの授業で作品を8つくらい紹介してしまいました。話はつながっているのですが、学生に全部わかってもらうのは難しかったようで、2年目は半分くらいに減らしました。まだ試行錯誤中で、学生との距離感のとり方が難しいというのが今も悩みです。全く顔がわからずに話している感覚が強いので、2回でもできることはあるはずなのに、2回でできないのは私の技術不足です。それをどう考えていったらいいか星野先生と話しながら改善できればと願っています。(文学部 高岡先生)

FD前半で紹介された二つの科目(ジェンダー、持続可能な社会)については、ゼミ形式で教員が手間をかけている授業なので、アンケートでもある程度の満足度が出て当然と言えそうですが、従来のような対人数に対する講義形式でそれなりの満足度を出すのは、そう簡単なことではありません。しかし、今回のアンケートを見ると、ほとんどが4点台の満足度であり、一番低いものでも3.9というのは、かなりよい数字です。それは先生方が創意工夫をしながら取り組んでくださっているからだと思われます。今回のFDではその一端をお聞かせいただくことができ、非常に有益なものになりました。上記で語られているように反省点も多くありますが、「教養コア科目」全体の船出としてはまずは順調なものとして評価してもよいのではないかと考えます。今後は、これらの科目を——当初の構想の通り——教養カリキュラム全体の中に「コア」として、さらに有機的に位置づけてゆくことも検討課題です。

## 本学の教員養成課程の改善・高度化に向けた 大学教員と附属教員の連携研究推進事業

今般、教員免許法が改定され、平成31年度の入学生から新しい教職課程が適用されます。新課程では「教職に関する科目」と「教科に関する科目」の区別が撤廃され、それに伴い、専門科目の「教職教育」性の強化が求められることが予想されています。これは、各教科の専門科目担当教員にも教科教育に関する確かな識見や研究業績が求められることを意味します。このような新しい状況に対応するために、本学では学長の指示により、教育計画室と教育システム研究開発センターが連携して、「**本学の教員養成課程の改善・高度化に向けた大学教員と附属教員の連携研究推進事業**」を実施することになりました。これは、大学の教員と附属校の教員が連携して教科教育に関する共同研究を実施して、その成果を『教育システム研究』その他に発表していただく、というものです。

平成28年度は、まず各教科において少数の教員の方々に試行をお願いして、論文を執筆していただきました。白羽の矢を立てた先生方、またボランティアに名乗りを上げてくださった先生方のご協力により、幸い下記の10本の成果が形になりましたので、『教育システム研究』第12号において特集として掲載させていただきました。センターのホームページからもご覧いただけます。これらの論文をモデルとして、今後、さらに多くの教員の方々に連携研究を実施していただく予定です。

このプロジェクトは、直接的には教員免許法改訂への対応がきっかけですが、それ以前から、大学と附属が連携した教員養成の改善や高度化は本学における大きな懸案でもありました。今回の試みが、大学と附属校との連携のいっそうの深化と、それに基づく本学の教職教育のさらなる充実につながることを願います。

中等教育国語科古典分野における興味喚起の授業研究  
—きっかけとしての落語創作—

神徳圭二 (中等教育学校)  
鈴木広光 (文学部)

保健体育授業「スポーツ鬼ごっこ」の実践報告①  
—競技特性と教員の関わりの観点から—

石坂友司 (生活環境学部)

公民科教育と社会学の視点  
—ドラえもんの新旧比較を通じた情報社会の理解—

鮫島京一 (中等教育学校)  
林拓也・水垣源太郎 (文学部)

保健体育授業「スポーツ鬼ごっこ」の実践報告②  
—学習目標及び評価の観点から—

井上洋一 (生活環境学部)

数学的活動を通じた数列学習の実践検討  
—高等学校数学科教育における高大連携授業研究の試み—

横弥直浩 (中等教育学校)  
片桐民陽・小林毅・松澤淳一 (理学部)

家庭科教育・教員養成改善の契機としての高大連携授業  
研究の試み

—生命の誕生と子育てに関する授業の検討—  
永曾義子 (中等教育学校)  
松岡悦子・芝崎学 (生活環境学部)

高等学校理科「生物」領域と大学の「生物学」をつなぐ  
—附属学校教員と大学教員とによる双方向的授業・講義  
改善の試み—

櫻井昭 (中等教育学校)  
渡邊利雄・保智己・酒井敦 (理学部)

家庭科教育として行う防災教育の実践について  
—奈良女子大学附属中等教育学校におけるクロスロード・  
ゲーム実践の検討を中心に—

野田隆 (生活環境学部)

家庭科教員養成における教職実践演習の効果  
—模擬授業の検証(1)—

永曾義子 (中等教育学校)  
原田雅史・佐野奈緒子・安川涼子 (生活環境学部)  
山本実穂 (生活環境学部学生)

「沖縄」を英語で学ぶ  
—英語科教育法における教科連携型教材を活用した協同  
学習の可能性—

秋山啓子 (中等教育学校)  
吉村あき子 (文学部)

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター 40 ■

2017年3月30日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL：0742-20-3352

Website：http://www.nara-wu.ac.jp/crades/

mail：crades@cc.nara-wu.ac.jp